

## もう後がない

某日、開院以来二十五年、面倒を見て貰っていた東芝の保守点検サービスの甘木氏が来て、現在使っているレントゲンテレビの部品類がすべて製造終了になったので、点検はともかく部品交換を要する修理には、平成二十三年からは対応出来なくなりますという。

そういわれればかれこれ十年も前に、装置の本体はもうとつくり販売終了したので、今はアフターサービスの為だけにパーツを製造し、補給しているのだという話を聞いた。

その時、さすがはモノ造りニッポンの雄、東芝だと感服した。それからでも十五年経っている。直接儲けにならないのに二十年以上も部品をバックアップしてくれていたとあれば、それでももう十分で、この辺で製造打ち切りは仕方がないという気もする。

昔、占領下の日本で二流、三流のアメリカ映画が氾濫していた頃、ボブ・ホープとかいう頃のしゃくれた喜劇俳優がいた。映画の題名などは忘れたが、彼が前線の米軍兵士を慰問に来て、舞台の上で鉄砲を撃ったがタマが出ない。

「 Oh, Made in Japan ! 」

無然として銃を放り出した彼の科白に満員の兵士達がドツと笑ったのを、私はまだ忘れてはいない。

英語を知らない小学生にも、お粗末な工業製品しか作れないニッポンが嘲笑されていることはよく判って、子供心にも「この野郎」  
と思ったのであろう。その後世界を席卷した日本の工業製品の評判には、溜飲が下がる思いで今日に至ってはいるけれど。

今まで春秋の二回、半日ばかりで丁寧に点検と補修を繰り返してくれたおかげで、診療中に突然撮影不能に陥った事態は、記憶では二回しか無い。そのたびに電話一本で作業服姿の頼もしいお兄ちゃん  
が駆けつけてくれて、半日くらいで完璧に修理してくれた。

保守点検サービスの手厚さも立派なものだったが、二十五年も  
淡々と動き続ける電子部品や可動部の機械部品の丈夫なこと、思い  
起こせば感服のほかはない。

しかしいずれ故障は起こるであろうし、その際必要な交換部品が  
無ければ、遂に装置全体がスクラップ化せざるを得ないことになる  
という話が急に現実になって、これには当惑した。

部品の入手難を理由に、現に立派に稼働している装置を、先手を打って新製品に代えるには、ある経営感覚が必要だろうが、ケチな私にはあいにくそれが無い。しかもX線画像をフィルムに記録する時代は終わりに向かっているらしく、水道に接続して使う自動現像機を下取りしてやるから早くデジタル方式に代えろという勧誘が頻りに来る。これにも関心はあるけれど、開業の時、その費用の六分の一を投じた設備本体が動かなくなる時を想像して困っている。線源が無ければデジタルもヘチマも無い。

開業当時、X線を出す管球は十年くらい使ったら交換が必要になるでしょうと言われたけれど、遂に交換しないまま二十五年経ってしまった。意地の悪い同期生がいて、それは器械が丈夫というよりも使用頻度の問題で、オタクの年間撮影数など大病院の一週間の撮影数にも及ばないのではないかという。だから装置が長持ちする筈だと、言われてみればそうかもしれぬ。高血圧症が圧倒的に多い日常の診療で胸部、消化管の映像が是非必要だと思ふことはそれほど多くはないし、外傷を初診で診ることも殆ど無くなったのでホネの異常を探すこともない。結局X線装置が忙しいのは生活習慣病健診の時期だけである。

撮影が出来ないとすると、健診に参加出来ず、これは小医院の収支への影響は大きい。

それに胸部のX線写真一枚が欲しい場合、それがすぐに撮れるということとは、敢えて慣れない横文字を使えば、医者のもていばーシヨンの維持には必須である。

つまり気が付いてみれば、この装置無くして医院の存続があり得なくなっているのに、装置を更新し採算をとるには、もう時間が無い。装置ではなくそれを使う人間の方に、残された時間が無くなっている。

(神庫 平成二十五年三月)